

魚蠻子

(二〇八二年六月)

江淮水爲田 江淮水を田と爲し

舟楫爲室居 舟楫を室居と爲す

魚蝦以爲糧 魚蝦以て糧と爲し

不耕自有餘 耕さざるも自から余り有り

異哉魚蠻子 異なる哉魚蛮子

本非左衽徒 本左衽の徒に非ず

連排入江住 連排江に入つて住す

竹瓦三尺廬 竹瓦三尺の廬

於焉長子孫 焉に於て子孫を長す

戚施且侏儒 戚施且つ侏儒

擘水取魴鯉 水を擘きて魴鯉を取る

易如拾諸塗 易きこと諸を塗に拾ふが如し

破釜不著鹽 破釜塩を著ず

雪鱗萁青蔬 雪鱗青蔬を萁ふ

一飽便甘寢 一飽すれば便ち甘寝

何異獺與狙 何ぞ異ならん獺と狙とに

人間行路難 人間行路難し

踏地出賦租 踏地賦租を出だす

不如魚蠻子 如かず魚蛮子の

駕浪浮空虛 浪に駕して空虛に浮ぶに

空虛未可知 空虛未だ知る可からず

會當算舟車 會ず当に舟車に算すべし

蠻子叩頭泣 蠻子叩頭して泣く

勿語桑大夫 語る勿かれ桑大夫にと

蘇東坡近藤光男より抄出

江淮地方の漁夫にとつては川が田であり、舟が住まいである。魚や小えびを日常の食糧に当てるから。田は耕さないが食糧はあり余っている。ひどく奇異な人間とみえるこの地の漁夫、魚蛮子たち、彼らとて、もともと野蛮人であつたわけではない。竹葺きの屋根の三尺四方の小屋を水上にうち並べて住まい、そしてそこで子孫を増やしたのであるが、生まれた子はせむしでおまけにこびとどつた。もりを水中に打ち込んで魴や鯉を取る。そのたやすさと言えば、まるで道に落ちてゐるものを拾うようである。その獲物を破れた釜で煮て塩もつけず、青い蔬菜を雑えて、雪のように白い魚の羹にし、腹がぐちればうまいを貪る。かわうそか猿となんの違いもない。人間世界の旅路はいかにも困難、お役人が田地を踏査されて税金を課される。いっそう君ら魚蛮子のように浪に乗つて虚空に浮かんでいるにこしたことはない。だが待て、その。『虚空』とてわからんぞ。いずれはきつと君たちの舟に税をかけられるに違いない。(漢のとき御史大夫の桑弘羊さまは。舟車に繒銭の税をおかけになつたぞ)。魚蛮子たちは頭を地にすりつけてお辞儀をし。どうかその桑弘羊さまとやらに、わしらのことを話さんでお願いくださいと泣いて頼むのだった。

・魚蛮子 漁父。獺。蛮子とは文化の聞けない民。この詩は宋の張翥が識されて南方の官にいたとき作つた漁父詩の意を取つたものであると、陸游の老学菴筆記にいう。張翥の漁父詩は、
家在采江辺 家は采江の辺に在り
門前碧水連 門前に碧水連なる
小舟勝養馬 小舟は馬を養ふに勝り
大罟常耕田 大罟は田を耕すに当る
保甲原無籍 保甲には原と籍無く
青苗不著錢 青苗には錢を著けず
桃源在何處 桃源何れの処にか在る
此地有神仙 此の地に神仙有り

・舟楫 舟をいう。楫はかい。
・魚蝦以爲糧 魚蝦は魚と小えびの類。漢書の五行志に「吳地は舟を以て家と爲し、魚を以て食と爲す」

・左衽徒 野蛮人。左衽とは襟を左まゝにする。野蛮人の風俗。書経に「四夷は左衽す」、また論語の憲問篇に「管仲微せば、吾其れ髮を被り衽を左にせん」

・連排 連も排もつらなる、つられる。
・於焉 焉はふつう句末の語氣詞と考えられるであろうが、「心不在焉、視而不見」(心焉に在らざれば、視れども見えず) (大学) のように、近称指示詞に用いられる。

・戚施・侏儒 せむしとこびと。國語の晋語の四に「戚施は仰が使む可からず、侏儒は援が使む可からず」

・擘 つんざく。裂く。
・魴鯉 魴はおしきうお。淡水魚。
・萁 あつものに雑える蔬菜。またその動作。

・甘寝 熟睡すること。安らかにねむる。
・獺と狙 獺はかわおそ。指の間に隙をそなえ、上手に水中に潜り魚を捕える。狙は、ざる。

・行路難 古梁府の曲題に行路難がある。杜甫の詩に「信に人間行路の難き有り」(巻十三、將に成都の草堂に赴かんとす)

・踏地出賦租 春秋の宣公十五年の「初て敵に税す」の社注に「公田の法、十に其一の一を取る。今又其の餘畝を賦んで、復た其の一を取む」税の二重取りである

踏地はこの履敵と同じで、田敵を巡つて穀物のできぐあいをしらべる。賦租は税。
・算舟車 舟や車に税をかける。漢書の食貨志に「武帝元光六年冬、初めて商車に算す」その李奇の注に「始めて商買の車船に税し、算を出さしむ」算とは漢代の税法で、繒銭一貫ごとに二十錢を所得税として収めさせた。史記の平準書(平凡社の中国古典文学全集史記上に拙訳あり)を参照。

・叩頭 頭を地面にすりつけてするおじぎ。
・桑大夫 漢の桑弘羊。武帝の時、大農丞となり天下の塩鉄を管理し、平準法を作る。元封中、御史大夫となり、霍光とともに昭帝を輔佐し、のち霍光を怨望し上官桀と謀反して誅せられた。